

① ミオンの湯けむり

作詞 井ノ川正平
作曲 吉楽勝太郎
編曲 中林久明

- 一、 苗場おろしも 和らぎて
黄桜の丘 花ひらく
花見の宴も にぎわいて
ミオンの湯けむり なつかしく
君の面影 しのびつつ
- 二、 炎える太陽 阿寺山
入れば涼風 さわやかに
祭りの花火 遠くみて
君待つミオンの 湯のかおり
今宵の誓い いつまでも
- 三、 紅葉のもえる 鷹の巢は
大河に紅の 影流し
苗場の山は はや白く
今宵ミオンの 湯の宿で
待つは愛しき 君の影
- 四、 降り積む雪は 野も山も
深く静かに 包み込む
河の瀬音も 絶えてなく
湯けむり深き ミオンの湯
二人の影は 春を待ち

② 男の門出

作詞 杉たいら
作曲 吉楽勝太郎
編曲 斎藤義和

- 一、 川の流れも うき世のような
岩のくぼみの ひとしづく
一擲こいで 本流にのれば
俺の明日が 見えてくる
みなぎる闘志 血潮がさわぐ
男一代 度胸の門出
- 二、 岸にうずまく 病葉落葉
同じところを 回るだけ
歩いた過去 未練をすてて
大器晩成 夢にみて
洋々はるか 大河のながれ
男一代 度胸の門出
- 三、 やるぞ見ておれ 男じゃないか
人生二度の 道ならば
あとえは引かぬ 男の意地が
命ながらい あるかぎり
愛しの人よ 待ってておくれ
男一代 度胸の門出

③ 我が家の絆

作詞 杉たいら
作曲 吉楽勝太郎
編曲 斎藤義和

- 一、 年代は大きく はなれていても
嫁さん婆さん 元気な声は
朝食の一品 仲間入り
良いことあるのか 茶柱立てば
湯気のむこうに 虹がたつ
我が家の誇り 二世帯家族
- 二、 窓の朝日が まぶしくひかる
みんなの宝 福の神
お金はなくても 真心あれば
建物はポロでも 子は育つ
我が家の自慢 二世帯家族
- 三、 おなじ一生 くよくよせずに
間口を広めて 楽しく暮らす
仕事を忘れ 温泉も
時には大切な 明日の力
ここはみんなの 生きる場所
我が家はつづく 二世帯家族

④ お酒になりたい

作詞 河合創一郎
作曲 吉楽勝太郎
編曲 斎藤義和

一、 日暮れて今日も わたしのお店

あなた浮かない 手酌酒

お酒になりたい お酒になって

温めてあげたい その心

世間吹く風 冷えびえするから

二、 両手は荒れて 節くれた指

生きる厳しさ 物語る

お酒がまわれれば 暫く寝込む

無口なあなたの お決まりね

愚痴もこぼさぬ 男の人なの

三、 むっくり起きて また来ると言う

お気をつけてと 見送るの

お酒になりたい お酒になって

醸してあげたい 明日の夢

うしろ姿に 憂いを見るから

⑤ 春うらうらの歌

作詩 野本郁太郎
作曲 吉楽勝太郎
編曲 潮宮的恒

ふるさとの 黄桜の丘 うらうら

白い国の人 うらうら

花よ 月よ 星よ

夢うらうら

⑥ ベルナティオ音頭

作詩 金澤友一
作曲 吉楽勝太郎
編曲 斎藤義和

一、 ああー

春は アイリス 花咲く頃は

老いも 若きも 連れ添うて

恋も 芽生える ひばり舞う

サーサ 唄えや 皆踊れ

踊り 明かそう ベルナティオ

二、 ああー

夏は グリーンの 絨毯 広し

サッカー ゴルフに ベルナティオ

櫓太鼓に 盆おどり

サーサ 唄えや 皆踊れ

踊り 明かそう ベルナティオ

三、 ああー

秋は コスモス 紅葉のまつり

湖水に 白鷺 舞い遊ぶ

すすきが招く 虫すだく

サーサ 唄えや 皆踊れ

踊り明かそう ベルナティオ

四、 ああー

冬は 白銀 当間の山に

滑降 回転 ジャンプやら

五、 ああー

荒野 拓いた 先人達の

槌音 聞こえる 当間山

今じゃ世界の ベルナティオ

サーサ 唄えや 皆踊れ

踊り明かそう ベルナティオ

華のゲレンデ ベルナティオ
サーサ 唄えや 皆踊れ
踊り明かそう ベルナティオ

⑦ 金婚桜

作詩 早川たけお
作曲 吉楽勝太郎
編曲 斎藤義和

一、お前と一緒になつた 記念樹に
みしよう

実生の苗から 二人で植えた

ほんとに昨日のような 気がするけれど

あれから五十年 今年もきれいな花を観る
めおと あかし きんこんざくら

夫婦の証し 金婚桜

二、子育てどきは夢中で 桜花も見ず
まご

ようやく今では 孫との花見
あめがせしの

よくぞ雨風凌ぎ 頑張ったよね
いっすい

一睡五十年 喜び悲しみ込み上げて
いっすい

我が家の宝 金婚桜

三、今年の雪にも負けず 耐えたね
こら

健気な姿を 愛しく思う
けなげ

幹や枝が折れたり 痛々しいね
みき えだ

感謝の五十年 お礼の言葉も山ほどよ
いえじゆう

家中元氣 明るい笑顔

⑧ 男の夢道歩いてね

作詩 河合創一郎
作曲 吉楽勝太郎
編曲 斎藤義和

一、他人じゃないから おまえと呼んで
押し掛け女房に なつてもいいの

あなたは一人じゃ 子供のよう
身の回りの事 できない入ね

女のつとめを 果すから

男の夢道 歩いてね
ゆめみち

二、私に陽射しは 届かなかった
女のしあわせ あきらめてたの

湿った心に 風を通した
あなたが笑顔で 差し出す両手

全てが傷んで 朽ちるのを
救ってくれなの あの日から

三、心に誓って 忘れはしない
二人の出縫いを いついつまでも
あなたを側から 支えることに
私のしあわせ 見つけてゆく
女のまごころ 尽すから
男の夢道 歩いてね

三、心に誓って 忘れはしない
二人の出縫いを いついつまでも

三、心に誓って 忘れはしない
二人の出縫いを いついつまでも

三、心に誓って 忘れはしない
二人の出縫いを いついつまでも

三、心に誓って 忘れはしない
二人の出縫いを いついつまでも

三、心に誓って 忘れはしない
二人の出縫いを いついつまでも

三、心に誓って 忘れはしない
二人の出縫いを いついつまでも

三、心に誓って 忘れはしない
二人の出縫いを いついつまでも

⑨ 顔とかお

作詩 南雲孝雄
作曲 吉楽勝太郎
編曲 斎藤義和

一、みんな達者で 生活していたか
遠い昔の 顔とかお

年に一度の 越後の祭り
太鼓鳴りだしや 何時しか集い
肩をぶつけて 語り合い

夜に流れる 甚句節
じんく

二、逢えば変らぬ 情けが通う
年を重ねた 顔とかお

苦勞わすれて 昔のように
下駄を鳴らして おどりの中え
いっつか浮れて 音頭とりや
孫が後ろで 手をたたく

三、祭り終って 帰りの仕度
名残りおしげな 顔とかお
年に一度の 越後の祭り
明り消えれば 昔の顔が
涙浮べて 又来ると
向けた背中に 泣く夜風

三、祭り終って 帰りの仕度
名残りおしげな 顔とかお

三、祭り終って 帰りの仕度
名残りおしげな 顔とかお

三、祭り終って 帰りの仕度
名残りおしげな 顔とかお

三、祭り終って 帰りの仕度
名残りおしげな 顔とかお

三、祭り終って 帰りの仕度
名残りおしげな 顔とかお

三、祭り終って 帰りの仕度
名残りおしげな 顔とかお

三、祭り終って 帰りの仕度
名残りおしげな 顔とかお

三、祭り終って 帰りの仕度
名残りおしげな 顔とかお

三、祭り終って 帰りの仕度
名残りおしげな 顔とかお

三、祭り終って 帰りの仕度
名残りおしげな 顔とかお

三、祭り終って 帰りの仕度
名残りおしげな 顔とかお

⑩ おわら恋唄風の秋

作詩 伊藤 一生
作曲 吉楽勝太郎
編曲 斎藤義和

一、三日三晩の お盆の日々は

胡弓の音色が 恋しゆうてならぬ

あなた探して 彷徨う路地に

わたし見つめる 熱い目が

嬉しさ弾み 踊りも浮かれ

おわら恋唄 朝方 戻る

二、踊り続けて あなたに逢って

願いが叶って 恋しい胸に

浜のユウスゲ 一夜でしぼむ

季節覚えの 逢瀬なら

織姫星か わたしの恋は

おわら恋歌 ひねもす尽きず

三、駅のホームで 見送りすれば

茜の小袖が 涙にしめる

踊るわたしに 手を振りながら

遠く去り行く 恋の風

想は残る まぶたの中に、
おわら恋唄 行く秋悲し

⑪ 男じやないか

作詩 早川たけお
作曲 吉楽勝太郎
編曲 斎藤義和

一、天に向かって 聳えてる

いつかお前の 上に立つ

男じやないか 弱音を吐くな

汗と涙に まみれても

俺は進むぜ 天までも

二、恋も人生 みな同じ

何度ふられて また惚れる

男じやないか 元気を出せよ

波乱万丈 波高し

苦労しただけ 価値がある

三、可愛いあの娘が 欲しければ

どんとぶつかれ 命がけ

男じやないか ハートを射抜け

命燃やして ぶち当たれ

行く手見据えて 俺は行く

⑫ 屋台の酒場

作詩 黒皮羽生
作曲 吉楽勝太郎
編曲 斎藤義和

一、路地裏屋台の赤提灯は

ほのかにやさしい看板娘

人情熱爛お疲れさんの

ひと言うれしいママもいる

コトコト煮立てる味噌おでん

二、肩寄せ合って袖すりながら

おおボラ吹いてのふるさと自慢

酔えばこの胸よろける夢を

繕ろいながらのふたりづれ

忘れてなるかよ負け惜しみ

三、路地裏屋台の赤提灯は

笑顔がほころぶ看板娘

酒場のかざりは何んにもないが

明日もまたねのママがいる

希望の欠片を杖にして

男は夜更けの千鳥足

⑬ 越後恋めぐり

作詩 馬場たかえい
作曲 吉楽勝太郎
編曲 斎藤義和

一、湯船に 浮かぶ シルエット
君の うなじの 後れ毛が
なぜか 気になる 胸さわぎ
恋が 降るよな 星の夜
瀬波 月岡 岩室と
越後 湯の街 恋めぐり

二、どこの誰かも 知らぬのに
恋が芽生える カウンター
カクテルグラスの 赤い酒
春が来る来る ネオン街
三条 長岡 新潟と
越後 盛り場 恋めぐり

三、雪に 刻んだ シュプールが
恋の ゆくえを 教えてる
熱い地酒の 盃に
寒い 心を 暖める
湯沢 妙高 十日町
越後 雪国 恋めぐり

⑭ 城下町音頭

作詞 浜ゆうか
作曲 吉楽勝太郎
編曲 斎藤義和

一、アアア越後の 高田には
どるい 土塁をめぐらす 高田城
みえやぐら 三重櫓が 気高くて
春には夜桜 絢爛と
夏にはお堀の 蓮の花
我らがふるさと 城下町

二、アアア越後の 高田には
かよ 心を通わす 雁木みち
ほつこく 北国街道 中にして
大町 仲町 寺町と
きずな 絆で結ばれ 四百年
我らがふるさと 城下町

三、アアア越後の 高田には
ぎみょう 儀明川と関川 青田川
うまだ 馬出し 二の辻 三の辻
ろくじゅうよ 六十余ヶ寺院が 立ち並び
かじ 城下にとどろく 鐘の音が
我らがふるさと 城下町

⑮ 仲町しぐれ

作詞 浜ゆうか
作曲 吉楽勝太郎
編曲 斎藤義和

一、ひとつの傘に 肩寄せて
うまでばし 馬出橋から 儀明の川の
狭い路地裏 紺のれん
ママさん今夜は 別れの酒で
添えぬふたりの 最後の夜を
仲町しぐれが 頬ぬらす

二、心底尽くし 尽くしても
そばに居てくれ おまえで良いと
何で言っては くないの
ママさん今夜は やけ酒飲むわ
あなた根むわ 見返り橋で
仲町しぐれが 泣かす夜

三、思い出の指輪 外しても
きねん 好きなあなたと 暮らせるならば
何もいらぬ 欲しくない
ママさん今夜は とことん飲むわ
たばたいなり 田端稻荷も 許してくれる
仲町しぐれが 胸を刺す

⑩ 風になりたい

作詩 川並久代
作曲 吉楽勝太郎
編曲 斉藤竜夫

あなたの 傍らを通り抜ける
優しい風になりたくて
あなたの 背中を 後押しできる
力強い 追い風になりたくて
私は今 無風状態
立ちどまった あなたを
踏み出す 一歩を 待っています
あなたの 風になりたくて

⑪ 十日町 雪の温もりと色

作詩 不詳
作曲 吉楽勝太郎
編曲 斉藤竜夫

一、この地で私達は生まれ育った
そして知った
決して雪は冷たくない
人をあたたためる
温もりがあると
言う事を
二、この郷で私達は暮らし微笑む
そして分かった
必ず雪には色があると
看物を鍛える
色があると
言う事を
雪に咲く花が人と着物だと
私達は信じます

⑫ てんとうむし

作詞 平松直樹
作曲 吉楽勝太郎
編曲 斉藤竜夫 4.1

一、いつもは背中に
七つ星
ゆうべの夢では
ひとつへり
何だかおかしい六つ星
からだがか少し軽くなる
とまと畑に風が吹き
くるりと逆さになりました
二、いつもは背中に
七つ星
ひるねの夢では
六つへり
あっとおどろく一つ星
お陽さまぽっかり出たような
おなかの底からあたたかい
やさしい気持ちになりました